

レジデンス・イン・森下スタジオ ヴィジティング・フェロー

ダグマー・ヴァルザー パブリック・トーク

2012年11月13日(火) 19:00-21:30

スピーカー ダグマー・ヴァルザー

【はじめに】

本日はお越し下さいまして、ありがとうございます。

今回のパブリック・トークでは、私の演劇関係の仕事と、日本との関わりについてお話します。その際に、「気付くこと」と「視点」という2つの重要な点を、「国際的な意味で演劇とは何か」、および「異文化のコミュニケーション」という文脈で考えたいと思います。

今回で私は3度目の来日となります。来日する度に、日本の演劇は多様で一言では言い表せないと感じます。最初に来日したのは、2010年における国際交流基金の文化人招聘プログラムで、スイスとドイツの若手ドラマトルクのグループと一緒に招いていただきました。その時にインタビューを収録したラジオ番組を作りましたが、スイスと同じように、東京の若手演劇人もジャンルの越境型の作品や、パフォーマンスに重点を置いたもの、あるいはドキュメンタリー演劇やサイトスペシフィックな作品を上演していることが分かりました。当時私が気付いたのはその程度のことでした。

私は演劇評論家であり、スイスのラジオ局で演劇に関する番組の制作を行っていますが、最初にスイスの演劇について簡単に説明いたします。それに基づいて、私が演劇を観るときにどのような視点を持っているのか、それ故に日本の舞台芸術をどのように受け取ったかについてご理解いただけたと思います。

続きまして、私がプログラム・チームの一員として活動しているチューリヒの<テアター・シュペクターケル>というフェスティバルについてご紹介します。何年も前にこのテアター・シュペクターケルにおいて、私は日本の舞台芸術作品と初めて出会いました。その時、勅使川原三郎さんとダムタイプの作品を観ましたが、非常に感銘を受けたことを憶えています。私はテアター・シュペクターケルには5年ほど前から関わっていますが、勅使川原さんとダムタイプの作品は、私たちの現在の観客に強い印象を残し、3年前から開始した日本の現代的な舞台芸術を招聘するプログラムにおいても、未だに何らかの形で両作品は参照されます。

そしてトークの最後に、今回の来日で感じたことについてお話いたします。

【スイスの演劇について】

スイスはとても小さい国であると同時に多言語の国でもあります。多言語であるということは、当然ながら演劇界にも影響を及ぼしています。スイスのドイツ語圏の演劇は、ドイツやオーストリアといった他のドイツ語圏の演劇に似ています。また、スイスのフランス語圏の演劇は、フランス演劇にとっても近いです。

私は 5 年前にドイツ演劇専門の出版社より、スイスのドイツ語圏の演劇人との対話や、いくつかの劇団を紹介する本を、もう一人の演劇専門家との共著で刊行いたしました。そのタイトルが『Eigenart Schweiz』というもので、後者の「Schweiz」はドイツ語で「スイス」を意味しますが、前者の「Eigenart」は「独特な」とか「風変わりな」という意味です。

スイスのドイツ語圏の演劇は、音楽的で、とても快活で楽しく、時には偏屈だと言われます。皆様もおそらくご存知のクリストフ・マルターラーの作品はまさしくその典型です。またドイツ人は、スイスの演劇は政治性がないと言います。とはいえ、スイスのドイツ語圏演劇関係者はドイツ人と同じ言語を話し、似たような演劇教育を受け、演劇界のシステムも大体同じなのですが。

【公立劇場とフリーのシーンについて】

ドイツやオーストリアと同様に、スイスの演劇界には大きく 2 つのカテゴリーがあります。1 つは市や州などが予算を出している公立の劇場による演劇です。もう 1 つは、劇場に属さない演劇人によるフリー（インディペンデント）のシーンです。

公立の劇場は、もちろん劇場という空間を持ち、ほとんどの大都市にあります。予算は州または市が全て支出しています。各劇場では必ず役者のアンサンブル、またはダンサーや音楽家を雇用しています。こうした劇場で創られた作品は、いわゆる「教養市民層」を対象としています。「教養市民層」というのは、文化を生活に不可欠なものであると捉え、文学の造詣も深く、高度な教育を受けた市民を指します。こうした人々を対象としているため、上演作品はテキストや文学作品を重視しています。これまでによく上演されてきたのは、古典を現代風に読み込む、演出家が中心となって創った作品です。

公立の劇場はアンサンブルなどを雇用しているため、運営コストがかかります。時代が変わるにつれ、これだけコストのかかる劇場に公的資金を充当するのは果たして正しいのか、という疑問の声があがるようになり、劇場側にはそれを正当化する必要が生じています。とはいえ、小都市において、公立劇場は生活に不可欠な基本的なインフラの一部として理解され、大都市では公立劇場があるからこそ、安心して長期的に働けるので、質の高い芸術作品が創り出せる、と認識されています。最近では、公立劇場の正当化に関するディスカッションが各劇場で企画され、劇場が議論の場となっています。

もう 1 つのカテゴリーであるフリーのシーンについてですが、当然ながら経済的な状況は良いとは言えません。フリーの演劇人は一緒に集まって集団で作品を創り、プロジェクト毎に資金を集めています。こうしたフリーの演劇は、1960 年代から 1970 年代頃に、自分たちの前にそびえ立つ「教養市民層」を対象とする巨大な公立劇場の存在に疑問を感じ、それとは異なる自由かつ柔軟な活動の可能性を目指した演劇人たちが勝ち取ったものです。フリーのシーンで創られる作品は、革新的かつ実験的であるという評価を得ています。

最近のドイツ語圏の演劇では、フリーのシーンと公立劇場のシーンとがオーバーラップするようになっていますが、こうした状況の中で、フリーのシステムをいかにいまの時代に合ったものにするか、またその際に、芸術にとって本当に良いシステムをいかに構築し、かつアーティストの制作のた

めのコンディションをどう保証するか、という議論が起きています。

【テアター・シュペクターケルについて】

チューリヒの〈テアター・シュペクターケル〉は、スイスで最大かつ最も国際的なフェスティバルです。同フェスティバルは、オルタナティブなアートの在り方が問われていた 1981 年に始まりました。当時は大道芸を中心とし、また国際的なプログラムとして開始されました。毎年大体 30 から 35 の国際的な作品を招聘し、8 月から 9 月にかけて 18 日間にわたって開催されます。上演する作品の幅が広いのが特徴で、サーカスから非常にラディカルな作品まで、シリアスなものからポップなものまで、多岐にわたっています。もう 1 つの特徴は、チューリヒ湖畔の広大な草原の上で毎年劇場を建て、またレストランを作り、開催されることです。

フェスティバルのトップは 3 人体制で、1 人が技術面を、もう 1 人は運営面（つまり資金面）を担当し、3 人目が芸術監督のサンドロ・ルーニンで、私は 5 年前から彼と一緒に仕事をしています。ルーニンはいわゆる「南」の国、特にアフリカ南部や南米、アジアの作品への関心が高く、ヨーロッパ外のいろいろな国の作品を招聘し、実に国際的なフェスティバルを構成しています。

2010 年のフェスティバルは「地理的な重点」をテーマにプログラムを組み、その「重点」を東アジアと東南アジアに置きました。具体的には、中国、インドネシアやタイ、そして日本の作品を上演し、日本からは岡田利規のチェルフィッチュ、快快、タニノクロウの庭劇団ペニノの 3 つの劇団を招聘しました。

実はこの 3 つの劇団は全て、前年の 2009 年 10 月にベルリンの HAU (ハウ) という劇場で行われた日本特集「Tokyo Shibuya – next Generation」に招聘されています。この特集のキュレーションは、同劇場の当時の芸術監督だったマティアス・リリエントールさんと山口真樹子さんが手がけましたが、その時に彼らが投じた一石は、いまもかなりの影響を及ぼしていると言えます。

その後も私たちのフェスティバルは日本の若手による作品に関心を抱き続け、2011 年にはコンタクト・ゴンゾを、2012 年には危口統之さんの悪魔のしるしの「搬入プロジェクト」を招聘しました。同プロジェクトはチューリヒの他、バーゼルとルツェルンでも上演されました。

いまから振り返りますと、私たちのやりたかったのは、若手による多様な作品を日本から出来るだけ招聘したかった、ということです。招聘された理由には共通するポイントがございます。まず、いま申しあげました 5 作品は、皆大都市に住む若い世代を代表しています。次に、それぞれの作品がかなり異なるものの、いずれも明確な作風、かつ美的な感性とコンセプトを持っています。また、大都市出身の若手世代の作品は私たちにとって同時代性の強いものでしたが、私たちがそれらをエキゾチックなものとして観ようとしなくても、独特な、変わった作品として映りました。とはいえ、それぞれの作品はとてもオープンであり、内向的に閉じている訳ではありません。閉じていないが故に、各々の観客が持っている日本に対するイメージと関連づけることが可能となり、もともと自分たちが描いていた日本像をより拡張、あるいは完成させることが出来ました。それこそがまさに舞台芸術の醍醐味だと私は思います。

【日本との関わりについて—3.11の影響】

〈テアター・シュペクターケル〉で東南アジアと東アジアに重点を置いたプログラムを組んだ2010年に私は初めて日本に招かれました。翌2011年にTPAMで日本を訪問する機会がございましたが、その後に3月11日の東日本大震災が起きました。その時に私はすでにスイスに帰国していましたが、一連のカタストロフィーで自分のことのようにショックを受けました。また、アーティストたちが早いうちからインターネット上で発言をし、また福島第一原発の爆発事故後、自分たちには一体何が出来るのか、いかに作品を創って行けば良いのかと議論している姿に感銘を受けました。

2011年の夏頃に、「危機に対するアーティストの仕事」というテーマで岡田利規さんと三浦大輔さんにインタビューをしました。彼らが震災前に創った作品をヨーロッパで上演しましたが、震災やフクシマの影響を受けて創られた作品ではないのに、観る側の見方がどうしても変わってしまう、また創り手自身も、以前の自分の作品に対する見方が変わってしまうことを興味深く感じました。

アートというのは、今回のようなカタストロフィーに対する反応がジャーナリズムなどよりも時間がかかります。そもそもアートは何らかの反応を示さなければならないのか、という疑問も当然あると思います。ましてや原発の事故は、日本だけの問題ではなく、グローバルな問題です。このようなことを考えながら、私は1ヶ月前に東京に到着しました。そして日本に来て、演劇において何が起こったのかを、日本の社会において何が起こったのかを見出せるか、と自問しました。

そうした問いを抱えながらの今回の滞在で見たことについて、まだ考え抜いていないので不足している部分もあるかと思いますが、敢えてここでお話して、アーティストたちがどういうことを考え、どういう道を選んだのか、選ぼうとしているのかをディスカッションさせていただければ幸いです。

私が気づいた点は大まかに次の通りです：

- ① アーティストたちがコミュニケーションや絆を重視し、彼らの多くがコミュニティアートやアウトリーチプログラムを行っていること。
- ② こうした状況を鑑みて、アートは人々の心の支えになる、癒しになる、と言われていること。
- ③ いま開催中の〈フェスティバル／トーキョー〉において、フクシマに対する直接的あるいは間接的な反応として創られた作品が上演されていること。
- ④ 日本に限ったことではなく、何らかの危機的状況が起きた時によく議論される根本的な問いですが、アートは一体何が出来るのか、あるいは何をすべきか、どういった役割を果たすのか、という議論がなされていること。

【日本での日常生活における「演劇的」な体験】

私は演劇作品の中に世界の現実を見出そうとする一方、現実の中にも演劇的なものがあると考えており、そうした視点から私が日本で見聞きしたこと、体験したことを簡単に述べたいと思います。

- 外国から来ますと、寺や神社、奈良や京都に心が惹かれますが、今回私は、古(いにしえ)の自然に触れるために九州を訪問し、感動しました。
- タニノクロウさんが連れて行ってくれた、福島県の広野(ひろの)の破壊された風景には胸が痛みました。

- 私はこの度のレジデンスでは森下に居りますが、日常生活をおくっている森下の雰囲気は渋谷や新宿とは違うという点も満喫しています。例えば小さな家の軒下に、植木鉢がびっしりと並んでいる様子などにも感銘を受けました。
- 建設現場において、安全を期するために必ず多くの人が携わり、事故が起きないように努めているのも印象深いです。
- 地方の在来線に乗りますと、車掌が1つの車両から別の車両に移動する際に、くるっと回って乗客にお辞儀をする姿にも心を打たれました。
- 演劇的な比喻ですが、観ている側だったのがいつの間にか演じる側になっていた、という経験もありました。ラッシュアワーの電車の中で、自分はオブザーバーとして周りを観ているつもりでしたが、あまりにも混んでいるので、いかに人とぶつからないようにするのかという動きが自然と身についてしまいました。
- 美容院では、髪を洗った後にマッサージをしてもらったこと、また髪を切り終わって、セットしてもらった時に2人の従業員が同時にやってくれたことにもびっくりしました。
- 九州では温泉に、また森下では銭湯に入り、興味深かったです。
- 先の日曜日に行われた大規模なデモにも参加しました。

私が日本で経験したあらゆるシーンをいま申し上げましたが、これらは私の演劇的な好奇心を満たしてくれたばかりでなく、こうした日常生活の細かい点を観察することが、日本の演劇作品を、あるいは日本文化を理解することに役立つと私は考えます。

本日のパブリック・トークの冒頭で、「気づくこと」と「視点」という2つの概念が重要であると申し上げましたが、さらに「コンテキスト(文脈)」という概念も加えたいと思います。この3つが、国際的な演劇に関わる際に、また異文化コミュニケーションをする際に極めて大切だと感じます。

本日はありがとうございました。

(以下、質疑応答省略)